



敗戦80年・「阪神淡路大震災」後30年・ 「福島原発震災」後14年

天野 恵一

手立てをもっていなかったことだろう。」

この小田が直接に体験した「難死」状況とは、敗戦の日の前日、1945年8月14日の大阪空襲によってもたらされたものである。

私は、小田と会って個人的な会話をする体験は、ほんの数回ほどしか持っていないが、忘れられないエピソードを会の事務所で聞かされたことがある。

「私はサバカンが今でも食べられない。あの臭いがダメなんだ」。そう彼は語った。サバのカンヅメの臭いは、焼けただれた死体の臭いを想起させるのだ。「難死」、それは、そのように生涯忘れようもない、常に生々しい体験であったのだろう。その時、そう思った。

敗戦から50年の1995年1月17日未明の「阪神淡路大震災」の被災者となった小田は、まだ地中に多くの人が埋まっている状況下で、そういう事態をもたらしただその責任を問うこともせず、人命救助より「復興」のスローガンの下、またもやビジネス最優先の政治家・財界人・知識人（有識者・学者）・マスコミの大連合に向かって「被災者」というポジションから激しい怒りの

う、お粗末な「大東亜共栄圏の理想」と「天皇陛下のために死のう」の二つぐらいのものであった、と語りつつ、彼はこう続ける。

9月20日に、小田実没後18年シンポジウム「人間の国」はどこに？ 戦後80年目の現実―世界を覆う不穏な空気の中で考える―という集会が開催され（主催：小田実文学と市民運動を考える会）、私たちの会も、これに全面的に協力した（この集まりの報告は、本号に収められている）。すでに小田の『被災の思想 難死の思想』（朝日新聞社・1996年3月）を今年に入ってすぐ読み直していた私は、戦後20年の年（1965年）に『展望』（1月号）に書かれた「難死の思想」の方を久々に読み直して、この集まりに参加した。

「難死」、この小田がつくりだした独特の言葉について、彼は、そこで、以下のごとき説明を与えている。

敗戦が決まった時間、まだ子供であった小田には、国が公的に戦争（とその死）を美しく正当化する理念、例えば「散華」、「総力戦の理論」、「近代の超克」などはなかった。あったのは、西欧をやっつけようとい

「そして、私にとって、死とは――映画で見たり新聞で読んだりしたものではなくて、本当に自分の眼でおびただしく見た死は――決して特攻隊員の死のように、たとえば『散華』という名で呼ばれるような美しいものでも立派なものでもなかった。また、彼らの死のように『公状況』にとつて有意義な死でもなかった。私が見たのは無意味な死だった。その『公状況』のためには何の役にも立っていない、ただもう死にたくない死にたくない」と逃げまわっているうちに黒焦げになっ

てしまった、いわば、虫ケラどもの死であった。その虫ケラどもは武器をもっていなかった。ということは、特攻隊員のように、戦場の勇士のように自らの死を『公状況』のために有意義なものとする

声（具体的批判）を発し続けた。その持続的怒りの言葉の集積が『被災の思想 難死の思想』である。「人間はこのようなかたちで殺されてはならない」という強烈な思いとともに、ここで「難死」の体験は「被災」の体験と歴史的に重ねられている。この時、小田は憲法九条の絶対的平和主義の精神のかけがえのない大切さを再発見している。

私たちは、2011年3月11日に、千葉に住んでいた私たちをも被災者にする〈福島原発震災〉を体験することになった。戦後80年の今年は、その被災後14年である。〈3・11災後〉14年は、敗戦80年の時間と「阪神淡路大震災」後30年の時間と重ねて、考えられなければならない。

〈原発ゼロ〉という、そのあまりにも悲惨で、終わりが見えない体験をテコに、やつと広く共有された、あたりまえの意思を、いたるところで打ち砕こうという政府・財界・マスコミの一体化した攻撃は、今まさに強化されている。

〈敗戦後〉80年の時間と二つの〈被災の体験〉とその後の時間とを重ねて、現在を批判的に検証する。今年の本誌は、ほぼ、こういう問題意識で編集された。本号は、そのシメのつもりで編集した。

（あまの・やすかず／本誌編集委員）

人間への

書：山村雅治
「小田実没後18年シンポジウム」パンフレットより